日本古代
抒情詩集

折口信夫編

世界抒情詩選・日本古代

昭和二十八年十月十日　初版印刷
昭和二十八年十月十五日　初版發行

定價　三百圓
地方定價　三百拾圓

編者　折口信夫
發行者　東京都千代田區神田小川町三ノ八　河出孝雄
印刷者　東京都新宿區市ケ谷台町一　草刈親雄

東京都千代田區神田小川町三ノ八
發行所　株式會社　河出書房
振替口座東京一〇八〇二
電話神田(25)三一七四

中央製本印刷株式會社・印刷製本

目

次

記紀歌集……三
萬葉集……二五
宮廷傳承歌を中心に……二六
東歌……五〇
古民謠……九四
近代諷詠……一四二
創作的の歌……一七〇
新抒情詩……二〇八
古今和歌集……二三五
新古今和歌集……二九七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

＊
＊
＊
解説
日本抒情詩集の内容……三四三
索引……三四九

日本古代抒情詩集

記紀歌集

傳・瓊々杵尊

沖つ藻葉邊にはよれども、さ寢床もあたはぬかもよ。濱つ千鳥よ

日本紀

傳・豐玉毘賣

赤玉は緒さへ光れど、白玉の君がよそひし、尊くありけり

古事記

◎沖の方の藻は、海岸によせて來る。しかし濱では、寢床あたひもせぬことよ。寢られないで鳴きさわぐ濱千鳥、それの如く……。

＊普通、もはのは助辭と見てゐる。しかし、祝詞語の沖つ藻葉邊つ藻葉の葉であらう。意味の側では、特に葉を感じる必要はない。＊邊は、海岸、海べた。＊古い語法の一つで男女の性のいとなみをする事をあたふと言つた。その動詞に先だつ補足語が寢床である。「寢床あたふ」と言ふ風に熟してゐる。譯には、さ寢床を表す必要はない。

「濱つ千鳥を言はうとする刺戟が、豫め一二句をおこしたので、これは意味の上では重要でない。濱千鳥が夜もおちつかず、鳴き立ち騷ぐ樣を、空閨にゐる身によそへたものである。」

◎貫いた紐の緒までが光る程、美しい赤玉もあるが、私には、白玉がよい。白玉の樣なあの方のお身のまはりのが、尊く感ぜられる。

＊意味において、白玉に對照したものではない。たゞ修辭上、もつとも表現し易い樣式として、對比したまでゝ、意味は「白玉の」以下にある。＊「ひこほゝでみの命」が白玉を着けてゐられたなど言ふ事でもない。これも、枕詞同樣、讃美の爲につけた語である。それに、假の對比として、赤玉云々の句が据ゑられたのである。

「右の二つの歌は、技巧は別々になつてゐるが、樣式の點では殆、同じである。此等が、日本の抒情詩の先觸れとせられてゐる理由は、偶然な事にすぎない。相當に古い種類であるが、之に似た前型らしいものがなかつた、とは言へない程の、ある新しさをも持つてゐる。」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

伊須氣余理比賣（イスケヨリヒメ）

佐*韋川從（ヨ）　雲立ち渡り、畝*傍山
木*の葉さや
ぎぬ。風吹かむとす

古事記

伊須氣余理比賣

畝傍山　畫は雲*とゐ、夕されば、風吹かむと
ぞ　木の葉さやげる

古事記

◎佐韋川から雲がずつと立ち續いて、畝傍山よ。其所に、木の葉がざわついてゐる。風が吹き起らうとしてゐるのだ。

◎畝傍山、それは、晝は雲の如く、ぢつとしてゐて、今、日暮れが來た時に、風が吹きおこらうとして、木の葉がざわついてゐることよ。

＊後世、そこと推定せられた所は、數個所ある。たゞ畝傍山を、相當の距離から望む所である事は、疑ひない。いすけより媛の家のあつた所。＊畝傍山は、神武天皇の皇居もあつたし、其山の中には、その御陵もあつた。が、此所では、それを言ふのでなく、いすけより媛をたぶらかして、皇子たちを殺さうとする、腹違ひの長子當藝志美美命の居る所として、それを對照にとつたのである。＊たぎしみゝの命が反亂しようとするのを、暗示した歌と見なして來てゐたのである。

＊「雲としてぢつと居つて」、「雲の如く動かずに」。

「此二首は、おそらく相當に古い時代の敍景歌なのであらうが、それに、何か暗示のある樣に感じるのが常であつた古代人の習慣から、佐韋川・畝傍山などのある所から、歴史上の事件の中、特に知られたことに關係あるものと、考へて來たものと思はれる。しかし、古事記が此歌を傳誦した時代には、單なる敍景ばかりでなく、明らかに、人を愛し、又人を憎む意味のあるものと、理會してをつた事も事實である。」

仁徳天皇

道*の後(シリ)　こ*はだ處女(ヲトメ)を　雷(カミ)のごと聞えしかども、相枕まく

古事記

仁徳天皇

道の後　こはだ處女は、爭*はず　寢しくをしぞも　うるはしみ思ふ

古事記

◎遠い筑紫の國々の果てのこはだの處女、それが雷の如く、評判ばつかり高く聞えてゐたのだが、今この樣に、互に枕をかはして、寢てゐる。

◎筑紫の國の果て、そのこはだの處女は、ちつとも抵抗しない處女である。抵抗しないで、俺と寢た事を、可愛い事だと、俺は思ふ。

＊或地方の國々を一つにまとめて言ふ時　吉備道（キビノミチ）、筑紫ノ道、北陸道（クヌガノミチ）と言ふ風な表現をした。其道の最末の國を、道の後（シリ）と言ふ。＊こはだは日向の地名。髮長比賣の出た所である。

〔此二首とも、記紀等しく同文なのも、傳誦が一致してゐた事を示して、昔の人が、此歌に疑ひを持たなかつた事が感じられる。＊爭はずの句は、二度に用ゐられてゐるもので、歌謠としての用途を示したものと言へる。上句の一部分となつては、處女が直に自分に從つた事を、反芻する樣に言つてゐるし、下句については、その交情の睦じかつた事を、處女に對する愛にかけて、歌つてゐる。皆歌謠としての經路を經た古代の歌で、これ程明らかに、歌謠的要素の伺はれるのも少い。〕

〔仁德天皇が太子の頃、日向國諸縣（モロガタ）の髮長比賣とあつた時、歌はれた歌。髮長比賣は、最初應神天皇に召されて上つたのを、太子大雀命（オホサザキノミコト）がまづ婚（ア）うて後、請ひ受けたと傳へてゐる。成婚を誇つて歌ひ上げた古代人の心が、明らかに出てゐる。後に藤原鎌足が、

　我はもや　安見兒得たり。皆人の得かてにすと言ふ　安見兒得たり　萬葉集　二

と歌つた歌と、時代や歌の調子に差別があるが、同樣の心持ちが表れてゐる。〕

磐之媛命

衣(コロモ)こそ二重もよき。さ夜床(ヨドコ)を並べむ君は、か

しこきろかも

日本紀

仁德天皇

おしてる　難波の崎の並濱(ナラビハマ)　並べむとこそ

その子はありけめ

日本紀

◎衣なれば、それは二重の衣も似合はしうございます。さう言ふことも悪くはありません。夜床を並べて寢ようとなさる君だとすれば、怖しい事でございます。

◎難波の崎の並濱ではないが、私と並べようと言ふ神の旨で、あの王女はこの世に現れたことでせう。宮廷に正式の後宮が二方出來た起原を說くもの。

＊仁德天皇の皇后。記紀ともに、その嫉妬に關する多くの歌を傳へてゐる。その一部、八田皇女を宮廷に召された前後のもので、天皇が皇后の許諾を受けようとせられ、皇后はそれを拒まうとして爭ひ續け、最後に遠くに去つて了はれる事を、日本紀には傳へてゐる。＊おそろしいと言ふ意味の上に、恐懼して從はなければならないと言ふ氣持ちの起つて來る事に對して、皇后のそれを拂ひのけようとしてゐられる煩悶が出てゐると見るがよい。

＊難波の枕詞。＊難波の崎にいくつも入りこみが出來てゐて、濱が相對してあつたのを、序歌にとつて來たのだ。二人の位置の高い女性を同格として、同格に待遇しようとせられた心持ち。それに對して皇后が爭はれた事が訣る。＊あの娘の生れた理由は、さう言ふ處にあつたのだらう、と言ふのだ。

〔歌としては、寧、此二首の外に、秀れたものが相當に傳つてゐるが、一部分づゝ問題になる語があるので、磐之媛に關する傳誦は、これで代表させた。〕

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com